山のこびと　　スイス

昔むかし、あるところに、貧(まず)しい男とおかみさんがいて、娘(むすめ)がふたりありました。上の娘はグレータ、下の娘はチリアといいました。

ある日のこと。長い冬がやっと終わって、そこらにはまだ雪が積もっていましたが、山の上の、お日さまが一日じゅう当たるところには、緑の草が生えはじめていました。

父親は、娘たちにいいました。

「おまえたちのうち、どちらでもいいんだがね。明日、うちの二頭の牛を、山の草地へ連(つ)れて行って、草を食べさせてやってくれないか」

上の娘のグレータは、すぐに答えました。

「あたしに行かせて」

父親は、

「じゃあ、おまえ、行っておいで。あさっては、チリアが行くといい。ただし、左手へ上る小道は行かないように気をつけるんだぞ。山のこびとが出てくるかもしれないからな。出てきたらおしまいだぞ」といいました。

グレータは、山へ行くのがうれしくて、父親の話のおしまいのほうはほとんど聞いていませんでした。

つぎの日、母親は、ワインの小さいつぼと、ソーセージとパンを布に包(つつ)んで、グレータに持たせてやりました。グレータは、編(あ)み物を手さげのかごに入れて、牛を連れてうきうきと出かけて行きました。

緑の草地に着くと、牛たちは、すぐにやわらかい草を食べはじめました。グレータは、左手の細い小道に入って行って、クロッカスを何本がつみました。そして、腰(こし)をおろして、編み物を始めました。そのうち、お腹(なか)が空(す)いてきたので、お弁当(べんとう)を広げました。そのとき、がさがさという音がして、とんがり帽子(ぼうし)をかぶって大きなつえを持ったこびとが、丘(おか)を上がって来ました。グレータは、飛びあがって逃(に)げようとしました。けれども、こびとは、グレータの腕(うで)をつかまえていいました。

「何もしないよ。逃げるなよ。おれといっしょに来い」

グレータは、さけびました。

「神(かみ)さま、助けて！牛を連れて帰らないといけないの！」

こびとは、
「牛は、おれが家まで追って行ってやるよ」といって、笛を取り出して吹きました。すると、二頭の牛は、丘を下って村へ走って帰って行きました。
　こびとは、グレータに、
「ついて来い」といって、先に立って歩き出しました。どんどん、どんどん歩いて行くと、大きな岩の門の前に来ました。こびとは、門を、つえで三回たたきました。門は、ものすごい音を立てて開きました。ふたりが中に入って行くと、広い玄関の間に、たくさんの男たちがいました。それは、仕立て屋と、くつ屋と、肉屋と、召使いたちでした。男たちは、こびとを見ると、いっせいに大声をあげていいました。
「こんにちは、こんにちは、とんがり帽子のギアン・ピッチェンさま。そのとんがり帽子は、今までになくとんがっていますね！」
　こびとは、居間に入って行くと、戸棚からきれいな裁縫箱を取り出しました。裁縫箱には小箱が入っていて、小箱には大きな金の玉かざりのついたピンが入っていました。こびとは、ピンをグレータにくれていいました。
「この金のかざりピンをおまえにやろう。毎日、服につけるといい。だが、よごさないように気をつけるんだ。よごすとまずいことになるからな」
　それから、こびとは、グレータに、屋敷じゅうの部屋を見せて回りました。どれもたいそう美しい部屋でした。最後に、あるドアの前で立ち止まりました。そのドアのカギ穴には、カギがささったままになっていました。
「この部屋には、絶対に入ってはいけない。もし入ると、えらくまずいことになるからな」と、こびとはいいました。
　台所まで来ると、こびとは、グレータにいいました。
「さて、おまえは、今日からここで働くんだ。毎朝七時にわしにコーヒーを入れてくれ。そのあと、わしは森へ出かけて、一日じゅう帰らない。おまえは、家に残っている者たちのために食事の用意をしてくれ。夕方、わしが帰ってきたら、またコーヒーを入れてくれ。仕事はそれだけだ」
　グレータは泣き出しました。
「いやよ！お父さん、お母さん！うちに帰りたいよう」
「だまれ！泣きわめくんじゃない。金のかざりピンをやったじゃないか。あれをよごさ

ないように気をつけるんだぞ」
何日かたちました。こびとは、夕方になってもどってくると、いつも、グレータに、服につけている金のかざりピンを見せろといいました。ピンは、いつもぴかぴか光っていました。
二週間ほどたったある日のこと、グレータは、屋敷の中をあちこち見て回りました。どの部屋にもたくさんのお金や宝物が入っていて、
「これがみんなわたしのものだったら、うちはもう貧乏の心配はなくなるのに」と思いました。そのとき、もうじき四時のコーヒーの時間になるのに気がつきました。それで、台所へ行こうと階段のところまで行くと、あのカギのささったドアの前に出ました。
「こびとは、この部屋に入ってはいけないといったけど、いったい何があるのかしら。ちょっと入ってみましょう。わたしがドアを開けたことなんて、わかりっこないわ」
グレータは、そう思って、カギを回してみました。
ドアが開くと、床はいちめん、血の海でした。いたるところに女の死体がころがっています。グレータはびっくりぎょうてんしました。あんまりびっくりしたので、金のかざりピンが床に落ちて、血でよごれてしまいました。いそいでピンをひろいあげてドアを閉め、階段をかけおりました。金のかざりピンは、いくらあらっても、いくらこすっても、血のよごれは落ちませんでした。そこで、綿にくるんで小箱にしまうと、泣きながら、いそいで台所に行って、コーヒーをわかしました。
やがて、こびとが帰って来ました。そして、グレータの目に涙がたまっているのを見ていいました。
「どうして泣いているんだね。金のかざりピンを出して見せてごらん。きっと、おまえは好奇心に負けたんだね」
グレータは、ピンを出して見せないわけにはいきませんでした。こびとは、ピンがよごれているのを見ると、グレータの腕をつかんで階段を引きずっていって、あの部屋のドアを開けました。
「この部屋がそんなに見たいんなら、さあ、入っていいぞ」
こびとは、グレータを部屋の中へ突き飛ばして、カギをかけてしまいました。
さて、親たちは、グレータが帰って来ないので、たいそう心配していました。村じゅうの人たちが、グレータをさがしに山へ出かけましたが、左手へ上る小道に入ってみよ

うとする人はひとりもいませんでした。妹のチリアも、毎日グレータをさがしに出かけました。

ある日の夕方、チリアは、いくらさがしてもグレータの足跡(あしあと)も見つからないので、がっかりしてすわりこんでいました。すると、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんは、

「どうしてそんなに泣いてるんだね」とたずねました。

「お姉さんが、山へ牛を連れて行ったまま帰らないの。いくらさがしても見つからないんです」と、チリアは答えました。すると、おじいさんはいいました。

「それは、まちがいなく、とんがり帽子のギアン・ピッチェンのしわざだ。そのこびとのところへ行きなさい。でも、うまくやらなきゃだめだよ。こびとに出会ったら、まずおじぎをして、それから、お行儀(ぎょうぎ)よく『こんにちは、こんにちは、とんがり帽子のギアン・ピッチェンさま。そのとんがり帽子は、今までになくとんがっていますね』というんだ。そうすれば、あとはうまくいくだろう」

チリアは、おじいさんにお礼をいって、すっかりうれしくなって家に帰りました。そして、親たちにいいました。

「あしたは、牛を山へ連れて行って、左手の小道を上ってみるわ。グレータを見つけられるかもしれないの」

親たちは、どうかそんな危(あぶ)ないところへは行かないでおくれとたのみましたが、チリアは、聞き入れませんでした。

つぎの日、チリアはお弁当を持って山へ出かけ、左手の小道を上って行きました。やがて、お腹が空いてきたので、腰をおろして、お弁当を広げました。そのとき、とつぜん、足音がして、山のこびとが丘を上がってきました。

チリアはすぐに立ち上がって、こびとに向かっていねいにおじぎをしていいました。

「こんにちは、こんにちは、とんがり帽子のギアン・ピッチェンさま。そのとんがり帽子は、今までになくとんがっていますね。どうぞこちらにいらして、いっしょに食べませんか」

こびとは、

「いや、そんなものはいらん。それより、わしといっしょに来るんだ」といいました。

チリアが、

「よろこんで、ごいっしょしたいんですけれど、牛たちが家に帰れなくなってしまいます」というと、こびとは、笛を取り出して吹きました。牛たちは、家に帰って行きました。

こびとは、チリアにも、屋敷じゅうの部屋を見せて、金の玉かざりのついたピンをくれました。チリアは、こびとのために、コーヒーだけでなく、おいしい料理を作ってやり、居間や寝室をていねいに掃除して、くつをみがいてやったので、こびとはいつも上機嫌で出かけて行きました。ほかの男たちにも、チリアは親切にしてやりました。みんなからお礼をいわれると、チリアは、

「お礼なんていいのよ。でも、いつか、わたしがあんたたちの手助けがほしくなったら、助けてちょうだいね」といいました。

こびとの屋敷にやってきたつぎの日、チリアは、こびとが森に出かけると、金のかざりピンを部屋の引き出しにしまって、開けてはいけないドアの前に行きました。すると、ドアの向こうから弱々しい泣き声が聞こえました。ドアを開けると、チリアは、びっくりして倒れそうになりました。たくさんの死体にまじって、グレータがすわりこんで泣いていました。チリアはいいました。

「もう泣かないで。食べ物も飲み物も持ってきてあげるし、話し相手にもなってあげるわ。あのこびとは、きっとわたしがやっつける」

一週間が過ぎました。

ある晩、こびとが帰ってくるのが聞こえると、チリアは、悲しそうに泣くまねをしました。こびとはそれを見ると、ものすごく怒っていいました。

「どうして泣いてるんだ。金のかざりピンを見せるんだ。きっと好奇心に負けたんだな」

チリアは、金のかざりピンをさしだしました。こびとは、ピンがぴかぴか光っているのを見ると、

「それじゃあ、何かほかのことで泣いているのか」といいました。チリアはいいました。

「お父さんとお母さんのことを思い出したの。年をとって働けないから、娘がふたりともいなくなったら、きっと飢え死にするでしょう」

すると、こびとはいいました。

「なんだ、それだけのことか。それなら、今晩、ふくろにチーズとソーセージとバターとパンをいっぱい入れるんだ。ワインも二、三本入れてよろしい。だけどあんまりふく

ろを重たくするなよ。あしたの朝早く、わしがふくろをおまえの家の戸口に置いてきてやろう」

こびとが寝てしまうと、チリアは、地下室からチーズやソーセージをどっさり運んできてふくろにつめました。それから、池に行って、自分の赤い上着をくいにひっかけておきました。

つぎの朝はやく、チリアは、グレータのところへ行っていいました。

「戸口のふくろの中に食べ物をいっぱいつめて置いてあるの。そのふくろの中に入りなさい。こびとが、お父さんとお母さんのところへ運んでくれるから。とちゅうでこびとが休んだら、『わたし、見てるわよ』って小さな声でいうのよ」

グレータがふくろに入ると、チリアは、息ができるように小さな穴を開けておきました。そして、こびとを呼びました。こびとはすぐにやって来て、ふくろをかつぎました。

「こいつは、重すぎる」

「朝起きたばかりだから重く感じるのよ」

チリアは、

「ねえ、とちゅうで休んではだめよ。わたしはバルコニーから見ていますから。もし立ち止まったら、『わたし、見てるわよ』ってさけびますからね。もしふくろを下ろしたりしたら、わたしはすぐに池にとびこんで死んじゃいますからね」といいました。

こびとは出かけました。すぐに汗びっしょりになったので、ほんの少し立ち止まると、すぐに、「わたし、見てるわよ」という声が聞こえました。

「ちくしょう。まだ見てるのか」

こびとはまた歩きだしましたが、しばらくすると、また立ち止まらなくてはなりませんでした。するとまた、「わたし、見てるわよ」と、声がしました。

「ちぇっ、まだ見てるのか」

1. こびとはまたしかたなく歩きだしましたが、とうとう力がぬけて、ふくろを地面におろしてしまいました。そのとたん、池のほうから、どぶーんと音がしました。こびとが、走って行ってみると、池の中にチリアの赤い上着が見えました。こびとは、チリアを救おうとかけよりましたが、足を滑らせて水の中に落ちてしまいました。そのとき、松のかげからチリアが出てきて、こびとに向かって大きな石を投げこみました。

チリアが大声でさけぶと、こびとの屋敷の男たちがかけつけました。そして、仕立て屋はアイロンを投げつけ、くつ屋は鉄(てつ)の台を投げつけ、肉屋は骨(ほね)を投げつけ、召使いたちは、とにかく何やかやを持ってきて、こびとに投げつけました。すると、とつぜんものすごい地響(じひび)きがして、こびとは死んでしまいました。男たちは、やっとこびとから自由になって大よろこびしました。チリアは、グレータをふくろから出しました。

みんなは、こびとの屋敷の中を見て歩きました。すると、地下室におじいさんがひとり閉じこめられていました。おじいさんは、チリアにいいました。

「居間の横の小さな部屋に、引き出しがあって、その中に、証文(しょうもん)が一枚入っているんだ。そこにこう書いてある。『とんがり帽子のギアン・ピッチェンを倒(たお)すことができた者は、この屋敷の持ち主になる』とな」

チリアとグレータは、家に帰って行きました。お父さんとお母さんは、大喜びでふたりをだきしめました。つぎの日、みんなで、ギアン・ピッチェンの屋敷に行きました。それからというもの、みんなは、なに不自由(ふじゆう)なく、幸せに暮らしたということです。

では、みなさん、さようなら

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小沢俊夫訳／ぎょうせい